

赤水図、学校教育に活用を

高萩市出身で江戸時代の学者、長久保赤水（1717～1801年）の功績を伝える長久保赤水顕彰会（佐川春久会長）と日本地図学会は、赤水が完成させた日本地図について、学校教育への活用を推進する事業に乗り出した。現代の地図帳と合わせた活用法を教員向けに解説する動画を作るほか、同市内の中学校で出張授業も行う。

顕彰会・地図学会

赤水が完成させ、江戸時代の人々に広く利用された「改正日本輿地路程全図」（赤水図）は昨年度初めて中学校の地図帳に掲載された。ただ同会などは、全国の教員に赤水図に関する理解が広がっていないとして、さらに普及を図る。同学会は本年度、赤水が作成した各種地図の研究な

どを行う専門部会を設置し、同学会常任委員長で日本大経済学部の下部勝彦教授（地理学）が主査に就いた。14、15両日に市立松岡小学校（同市下手綱）の郷土資料室で行われた動画撮影では、下部教授が現代の地図帳と赤水図を比較しながら、どのような授業が考えられるかを解説した。



動画撮影に向け打ち合わせをする下部勝彦教授（左）＝高萩市下手綱

解説動画や出張授業で推進

15日の撮影は、木曾川、長良川、揖斐川の木曾三川などに着目。木曾三川は明治政府が大規模な河川改修を行ったことで分流が完成したが、かつては流れが複雑に入り乱れており「赤水図はぐちゃぐちゃな川の様子がきちんと表現されている。一つの史料として活用してもらいたい事例」と説明した。

下部教授は「今の地図帳を見ることが主目的で、それを補完する史料として赤水図を使う。地図が苦手な児童生徒が多いので、難しく地図に接するのではなく、児童生徒の直感で学習を楽しくしませんかというのが主眼だ」と狙いを語る。

動画は編集後、7月ごろに同顕彰会のホームページなどで公開する予定。小中学校、高校で社会や地理を担当する教員が参考にすることを想定する。同顕彰会は授業に役立つ教材として、縦84・6センチ、横128・8センチの赤水図を2倍、3倍、5倍にそれぞれ拡大したタペストリーの販売もしている。

秋には同市内の中学校で下部教授による出張授業も計画。授業内容を詰めて全国の教育委員会や学校に情報発信し、赤水図を使った授業の実施につなげてもらいたい考えだ。